

機関学術誌『心理学研究』と『JPR』を さらに育て上げていきましょう

昨年我が国の青色LED研究者、赤崎勇、天野浩、中村修二の3氏がノーベル物理学賞を受賞したのは記憶に新しいところです。その3氏のノーベル賞受賞に際して評価理由として挙げられたのは16編の論文であり、そのうち10編は日本応用物理学会発行の英文学術誌 *The Japanese Journal of Applied Physics* に掲載された論文でした。

このことを知ったとき、私は正直羨ましいと思いました。日本の心理学界では、自身の研究成果を世界に発信する際に、ややもすると日本の学術誌を選ばない傾向があります。前記の物理学での例のように、日本で行った研究成果を日本の英文学術誌（たとえば *Japanese Psychological Research* :JPR）に投稿することが当然のこととなるように、つまりはそうすることが投稿者のメリットになり、かつ、日本の心理学全体にとってもメリットとなるように、編集担当常務理事として努力すべきことを改めて意識した次第です。

すべての学術誌はその評価が高くなることを望んでいます。そうなるためにはまずは投稿数が多くならなければなりません。投稿数が多くなれば必然的に採択される論文のレベルも高くなり、評価は高くなります。幸いなことに、最近『心研』と『JPR』への投稿数は急増しており、数年前の約1.5倍となっています。この投稿数の増加は、査読の迅速性を高めたことによるところが大なのではないかと推測されます。ご尽力いただいている編集委員、査読者、編集事務局の皆さんに感謝いたします。

『心研』と『JPR』の今後について

昨年1月から編集委員会の下に将来構想小委員会（齋木潤委員長）を設置し、これからの学術誌編集体制について鋭意検討いただきました。その結果、策定された改革案は編集委員会全体での検討を経て本年3月に理事会に諸規程改正の一部として上程され、それが承認されるに至りました。その改革案の骨子は、従来『心研』と『JPR』の査読・編集を同一の編集委員会で行っていたのを、それぞれ別な専任の委員

会で行うように変える、という点にあります。長い年月を経て本学会においても本来あるべき形の学術誌編集体制になったということです。これによって、この後『心研』と『JPR』がそれぞれに適したやり方で進んでいきやすくなったと思います。

学術誌の世界的状況と『JPR』

『心理学ワールド58号』にて既に述べたことですが、現在、学術誌の世界は急激に変動し続けています。それに伴い英文誌『JPR』は否が応でも大きな変革を求められています。従来、そして今でも、多くの国際学術誌は、望むと望まざるとに拘わらず直接に間接に大手 publishers の軌の下、つまりは経済原理の下に置かれています。しかしながら、このような状況はいつまでも続かないのではないかと予想されます。特に、基本的に公的資金に支えられた学術的研究の成果は広く一般に公開されるべきとする理念が広く行き渡るようになると、出版社などによる従来からの“closed access”のやり方は早晚“open access”へと変わらざるを得ないことになるでしょう。また、最近では、新しいオンラインジャーナルが数多く生み出されており（その中には学術誌として信頼度の低いものもあるようです）、学術誌間の生き残り競争も激しくなっています。このような状況の下で『JPR』は今後どのように進むべきか、早急に明確な特徴づけと時宜にあった査読・編集体制の整備をなすべき時期にあるといえます。今はまさに、大手出版社にただ任せるのではなく、学会自らがより良い学術誌を実現させるべく動き出す時期といえるかもしれません。現実を見据えた継続的運営を基本としながらも、公益組織として、多くの研究者が望む理想的学術誌の姿を追い求めるべく、学会執行部としても努力しているところです。会員の皆様におかれましても、日本から世界へ発信する我々の学術誌『JPR』をより大きく高く「育て上げる」意識で、鋭意ご投稿などいただけますよう、お願い申し上げます。

（編集担当常務理事・北海道大学名誉教授
阿部純一）